拓殖大学 Shariah Research Institute
イスラーム研究所
معهد دراسات الشريعة
ニューズレター Vol.7 No.2

ハラール認証団体研修会参加報告

イスラーム研究所シャリーア専門委員会委員 遠藤利夫

2009年5月20日（水）から同28日（木）の9日間に亘りインドネシアのボゴールで開催されたインドネシアLPPOM MUI（イスラーム学者評議会付属食品薬品化粧品検査所）主催の海外ハラール認証団体向け研修会に、イスラーム研究所シャリーア専門委員会付設科学技術委員会武藤愛二氏と小生が参加したので報告する。ハラール（HALAL）とはイスラーム法上、合法的なもの、許されたものを意味するアラビア語である。

今回の研修会には7ヶ国11団体から24名が参加した。参加者はイスラーム法や食品専門家たちで認証団体名と研修内容は次の通りである。

米国（3団体）
Islamic Food and Nutrition Council of America（略称IFANCA）（2名）
Halal Food Council SEA（略称HFCS）（1名）
American Halal Foundation（略称AHF）（1名）
デンマーク（1団体）
Islamic Food Council Europe（略称IFCE）（2名）
ドイツ（1団体）
Halal Control e.K（略称EU）（3名）
オランダ（2団体）
Halal Food and Feed Inspection Authority（略称HFFIA）（3名）
Total Quality Halal Contract（3名）
オーストラリア（2団体）
Australian Halal Food Service（略称 AHFS）（2名）
Supreme Islamic Council of Halal Meat in Australia Inc.（略称SICHMA）（2名）
フィリピン（1団体）
Islamic Da'wa Council of The Philipines（略称 IDCP）（3名）
日本（1団体）
Japan Muslim Association（略称 JMA）（2名）

参加者集合写真

研修日程

5月20日　開会式、インドネシア工場査察（工場は参加団体毎に別行動）
5月21日　LPPOM MUIの組織説明
インドネシアにおけるハラール食品、薬品、化粧品の査察と認証基準
インドネシア企業工場査察
5月22日　工場での原料と由来品のチェックポイント
動物性原料と動物由来品のチェックポイント
微生物原料製品のチェックポイント
香料・調味料のチェックポイント
薬品、化粧品およびビタミン製品のチェックポイント
5月23日　MUIのハラール認証手続き（加工食品、屠畜動物、レストラン）
香料・調味料の査察手続き
ハラール認証の科学的裏づけ
5月24日　ハラール認証システムの原則
ハラール認証システムの構成要素
ハラール認証システムの評価
5月25日　紅茶プランテーション見学（ボゴール市郊外）
5月26日　企業工場査察（参加団体毎に工場は異なる）
5月27日　企業工場査察（参加団体毎に工場は異なる）
5月28日　工場査察内容発表と研修評価

開催目的はインドネシア最大のハラール認証団体であるLPPOM MUIの認証システムの習熟であり、参加者全員が原材料や製造工程の審査方法や工場査察を実施した。

今回の主催者インドネシアLPPOM MUIによるハラール認証開始の経緯と主な役割を説明する。

- 1988年、豚由来品を含んだ食品問題が発生し、イスラーム教徒の消費者は関係する食品の購入を中止した。そのためほとんどの企業は生産中止に追い込まれて多額の損失をこうむり、最終的には国民経済の安定性にまで影響が及んだ。そこでインドネシア政府は、イスラーム法学者グループの代表者から成る国内の著名な指導者組織であるMUI（インドネシア・ウラマー評議会）に対し、この国家的な問題の解決を要請した。MUIはそれを受けて1989年にLPPOM MUI（MUIの付属機関としてLPPOM：食品・薬品・化粧品検査所）を設立した。

LPPOM MUIの役割：

- 監査業務を遂行し、イスラーム法を遵守して製造された製品のみがハラール製品として認証されるようにする。
- イスラーム教徒の消費者に対し、ハラール製品に対する社会的関心を持つように促し、相談に応じる。
- 政府がハラール製品に関する政策、規則、規制、勧告を制定する際に助言を行う。
- 国内外のハラール認証機関ならびに全世界のその他関連機関を組織化する。
- ハラール証明書の発行。ハラール証明書（Halal Certificate）とはMUIが発行する書面のファトワー（宗教見解）であり、LPPOM MUIが実施した監査プロセスで製品がハラールであると認められたことを証明するものである。
- HAS（Halal Assuarance System）監査。ハラール認証を得た後の企業のハラール保証システム（HAS）維持に対する監査である。
- MUIファトワー委員会の認定。MUIファトワー委員会とはMUIに属する委員会の1つで、目的は特定問題に関する法的立場についてイスラーム法に基づく宗教見解を示すことである。このMUIの役割の一つであるファトワー委員会はインドネシアに所在する各イスラーム機関の代表者によって構成される。（注：ファトワーとは特定問題に関する法的立場についてのイスラーム法に基づく宗教見解である。ハラール認証プロセスにおけるファトワーは、LPPOM MUIが実施した監査プロセスに基づいて製品のハラール性またはハラーム性（イスラーム法において違法）を判定するものである。）

次にLPPOM MUIによるハラール認証基準の一部を紹介する。

- 原料は、MUIのファトワーに準拠したハラールでなければならない。
- 生産プロセスは、接触汚染やインフラ（施設など）によるハラームを回避できるように整備されていなければならない。豚および豚由来成分が、保管を含む流通経路から排除されていなければならない。
- 企業は、追跡可能性を確保する適切な管理記録システムを維持しなければならない。

- 企業は、HAS（ハラール保証システム）を構築し維持しなければならない。

原材料のハラール性に関する一般的基準：

- 豚または豚由来成分を含んだ原料を含んでいないこと。
- アルコール飲料（ハムル）またはその派生物を含んでいないこと。
- 動物起源のすべての原料は、イスラーム法に基づき屠畜したハラールな動物のものでなければならない（屠畜については、公認のハラール認証機関が発行したハラール証明書が必要）。
- たとえば腐肉、血、人体の一部といったハラームな物質を含んでいないこと。
- 食品の安全性を保ち、有害物質を製品から排除する。

植物原料に関する留意点：

- 植物起源の原料は基本的にはハラールであるが、ハラールではない添加剤や加工助剤で加工すればハラールではなくなる。
  砂糖、ジュース類での留意点
- 砂糖は、動物性由来の活性炭（例：牛骨等）を使用して脱色している場合がある
- アスコルビン酸（ビタミンC）は、発酵によって生成し（媒体の組成成分内容）、化学反応を生じさせる。酸化を防ぐため、ゼラチン（ほとんど牛・豚由来）で被覆している場合がある（原材料の調査）。
- クエン酸は発酵によって生成する（媒体の組成成分内容）。動物性由来の活性炭（例：牛骨等）を使用して脱色している場合がある
- ジュースの清澄化：遠心分離または酵素による処理（ペクチン質分解酵素）。加工助剤としてゼラチンを使用する場合がある。酵素の起源を解明する必要がある。

原材料の審査

1．ハラール製品生産に用いる原材料のリスト（メーカーの名称とそのコードを含む）と関係書類。すなわち
　ー原料の起源、成分の内訳、加工の流れを記した仕様書
　ー公認のハラール認証機関が発行したハラール証明書
　目的：ハラール生産に用いられるすべての原料がハラールとして承認されているかどうかを検査する。

2．原材料に対するコード化
　1つの原料に1つのコード。なぜなら同じ仕様の同種の原料であっても、ハラール性に違いがある場合がある。（例：ハラームな天然システイン（人間の髪）とハラール合成システイン（発酵）、植物由来グリセリンと動物由来グリセリン及び合成物、動物性脂肪酸と植物性脂肪酸）。

3．ハラール製品生産に用いるのと同一ラインでの非ハラール製品に使用する原料のリスト確認。
　目的：同一のラインでどのような種類の非ハラール原料が用いられているかを検査し、バッチ間の接触汚染を防止するために企業が講じている手続きを知る。

4．工場で使用されている豚肉、豚派生物、豚肉含有原料のリスト
　目的：豚肉またはその由来品を含んだ原料を識別し、そうした原料がどの製品に、あるいはどの生産ラインで使用されているかを検査する。

5．購入システムと記録文書
　・企業が原材料サプライヤーを変更する場合の手続きを知る。
　・企業が重要な原材料を購入する場合の必要条件の1つにハラール証明書が含まれているかどうかを検証する。
　・ハラール生産に用いるすべての重要原料を、認証メーカー以外から購入していないことを確認する。

6．追跡可能性システム
　・製造に含まれる各原料が、サプライヤーだけではなく製造者まで追跡できるかを検査する。
　・各原料のサプライヤー履歴が適切に記録されているかどうかを検査する。

生産システムの査察

1．ハラール生産ライン
　・ハラール生産のための専用ラインがあるかどうか、あるいは少なくとも豚肉を排除したラインをハラール生産のために確保しているかどうかを調べ、生産システムの操業が適切であることを確認する（たとえばハラール製品用の機器と非ハラール製品用の機器に適切なラベルが貼付されていて、別々の場所に保管されている）
　・システム上、ハラール生産ラインで非ハラール原料（少なくとも、豚肉、豚由来含有原料）が使用されることを防ぐ十分な措置が講じられているかを検査する。

研修風景

工場査察メンバー

2．倉庫管理
　・ハラール原材料と製品のために別個の保管貯蔵区画が確保されており、倉庫管理が適切に実行されているかを検査する。
　・原材料と製品の保管貯蔵システムについて、接触汚染を防いでいるかどうかを検査する（たとえばサンプル採取や製品計量のための器具は、ハラール原料用と非ハラール原料用とで別々になっていなければならない。）
　・原材料の受入システムを検査する（入荷原料が購入文書と一致しているかどうかを確認する）。
　・原材料の包装について、それがハラール原料リストおよび関係書類と一致しているかを確認する（たとえば原料の名称とコード、製造者、生産場所、工場番号、ロッド/バッチ番号、ハラールのロゴ）。

最後に、ハラール製品の認証取得後、企業は社内にハラール委員会を設置しハラール保証システム（HAS）の維持運営が必要となる。留意すべき点は次の通りである。

- HAS の実行には総合的品質管理が必要であり、社内ハラール委員と経営陣が製品のハラール性の維持に責任を負う。
- 意思の疎通。これが、知識の共有と社内の協力を促進するための方法である。
- 研修。従業員の研修の主な目的は、ハラール製品に関するイスラーム法についての理解を深めることである。
- 原料は例外なくハラールでなければならない。生産プロセスで特に注意すべき物質または加工は、技術指針であるハラールガイドに必ず記載しなければならない。
- 管理の改善。ハラール生産プロセスを保証するには、継続的にシステムの再検討を行い、改善を図ることが必要である。
- 社内監査を定期的に実行する。
- 何らかの矛盾点が生じたり手続き上の誤りが明らかになったりした場合には、直ちに是正措置を講じる。
- 企業は使用する原料と生産プロセスをHASマニュアルに誠実に記載し、その記載に基づいて日常のハラール生産業務を遂行する。
- 原材料や生産プロセスを変更する場合には認証機関に報告書を提出し、確認を受ける。

第4回アズハル卒業生世界連盟会議に出席して－報告

イスラーム研究所客員教授　徳 増 公 明

6月28日から30日まで「アズハルと西側（欧米諸国）－対話の原則と領域」をテーマとした第4回アズハル卒業生世界連盟会議がカイロ市内のグランド・ハイアット・ホテルにて開催されました。海外からは93名のイスラーム専門家・関係者、アズハル卒業生が招待され、エジプト国内からは約150名のアズハル関係者、卒業生が参加しました。日本からは武藤英臣イスラーム研究所客員教授と私が招待されました。招待された内には欧米からのキリスト教徒、ユダヤ教徒も数多く含まれていました。この一月に、多数のキリスト教徒、ユダヤ教徒の研究者や聖職者を欧米から招待して、かれらから自国におけるイスラームの置かれている立場、事情を聞く会議「アズハルと西側」が今回の会議に備えてのワークショップとして開催されています。

今回の会議においても主に、宗教間の継続的対話の重要性、西側とイスラームの間の緊張関係となっている大きな原因・理由（国際人間関係の基本やイスラームに対する偏見イメージを正す方法など）等について熱心に議論されました。

28日の開会式ではクルアーンの読誦に続いて、アハマド　タイイブ　アズハル大学学長（アズハル卒業生世界連盟会長）、前マルディブ大統領マームーン　アブドルカィユーム卒業生代表、マハムード　ザグズーク　ワカフ大臣、ムハンマド　タンターウイ　アズハル総長の挨拶がありました。続いてすぐに会議が開催され、3日間に渡って朝から夕方まで9セッションが行なわれました。各セッションは3～4人のパネリストがそれぞれ20分ずつスピーチし、その後、参加者との質疑応答があり、時には激しく論争する場面もありました。

参考までにスピーチの題名をいくつか挙げてみます。

1－米国におけるムスリムとキリスト教徒間の相互理解の方法
2－米国とイスラーム世界との関係再構築－新しい前進に向かって－
3－イスラームと西欧間の宗教対話の心理学的論拠
4－イスラームとキリスト教は一本の木からの二つの枝
5－西欧とのコミュニケーションを実現するアズハルの役割
6－今日における宗教間対話の継続の重要性
7－西欧におけるイスラームに対する誤解現象とそれを訂正するアズハルの役割
8－宗教間対話についての西欧のイスラーム学者の責任
9－ムスリムと西欧との関係改善への宗教的根拠
10－イスラーム文明と宗教間の共存
11－西欧とイスラームの緊張関係の原因
12－イスラームの価値と宗教間の人間性

アズハル卒業生集合写真

最終セッションの後、以下の声明文が発表されました。

第4回アズハル卒業生世界連盟会議声明文

1－この会議の参加者はイスラーム史始まって以来、信仰の光に照らされるこの地で、親切な受け入れと、寛大な接客接遇を受けたことに対して、アラブ・エジプト共和国大統領、政府、国民及びモスクとしてまた大学としてのアズハルに、心からの感謝を申し上げる。また、イスラームの気高いメッセージを発信するアズハルとその大学の成功を祈る。

2－参加者は、アズハルがイスラーム世界に千年以上も君臨してきた学問の殿堂であり、伝道の組織であること、寛容と公平を基盤とした中庸のカルキュラム（方法）を持ち、イスラームを代表すべき偉大な機関であることに同意した。アズハルは他の一神教との対話を行うために、その歴史とカルキュラムにおいて、資格を有するものであり、また学問と布教において、多様性を受容できる点についても、十分資格を有するものである。

3－人々の間の信仰と思想の相異は自然発生的なものであり、またクルアーンで「もしあなたの主の御心ならば、かれは人々をひとつのウンマ（イスラーム共同体）になされたであろう。だがかれらは相異しあっている。」（11章118節）と述べられているように、この相異はアッラーの意思でもある。そして、この相異は、その成果が良いものになった時には、諸国が互いに補完し合い、諸文明が発達していく財産の元となるものである。

4－政治的イデオロギーがその欲望を実現するために宗教を利用して作り出した危機に対応するため、啓示宗教者間の平和的共存と協力は、絶対的に必要となった。それゆえ、この会議はそれぞれの啓示宗教の信者が狂信と利己主義の峡谷から人間社会を救出する責任を持つよう、また親愛と同胞精神を広める上で天の導きを実行することを呼びかける。

5－文明間の対話の呼びかけは今日まで、お互いを接近させるための学問的カルキュラムへ変わることなく、ただ会合や会議で繰り返されるスローガンであった。それゆえ、この会議は啓示宗教間の相互認識と国家間の接近を実のあるものにする合意および共同のパートナーを探求することを基礎にした対話に対する憲章設定の作業を行う。

6－対話の枠組みとその境界を定める規則を作ることと、また会合場所が信仰心を擁護し、学問、政治、経済の倫理感が行き渡っている地域で行われることの必要がある。

7－勝利や優劣の区別を目的にする対話や、宗教間の相互の機会均等を無視した対話は、架け橋の建設をめざす対話ではない。また、それは人類の文明を脅かす様々な強大な脅威に立ち向かうためや様々な紛争を解決するために宗教者の能力を集結せんとする対話でもない。

8－文明間の対話を成功させるための最大の障害は、西欧がイスラーム社会に対して行なってきた不当な政策である。この障害を生んだキリスト教社会はそれを取り除くため、かれらの政治に訴えていく責任があり、啓示宗教の信仰心を代表する公平さを実現させる努力の責任がある。

9－西欧社会は何世紀にも亘ってイスラーム理解に無関心であった。結果それは相互の敵対心を生み出した。そして、今日、かれらはイスラームについて信頼できる権威機関から、正しいイスラームを知る努力が要求されている。同時にムスリムにも他の人々に耳を傾け、ムスリムではない人たちにイスラームを理解するための新しいメッセージやより理解しやすい方法を採用し、それを懇切に提供することが要求されている。

10－宗教間の合意範囲は相異による間隙より大きいものである。また諸宗教が合意した価値を基にした活動領域は、政治が廃退させたものを改善することができるのである。そのためには各宗教の信者間の協力と、溝をなくすことを目的とした学術機関に頼ることが求められる。

11－例えば環境問題やそれを脅かす危険性は、天啓宗教の信者たちの協力を必要としている最大の問題領域を代表するものの一つである。その解決には、彼らの持っている敵対行為や貧困と無知の影響と戦うために人々の感情を動かすことができる能力を必要とする。アズハル卒業生世界連盟は、この重大な問題を解決するためのいかなる努力にも協力する用意がある。

12－アズハル卒業生世界連盟は、公平で中庸な精神に代表されるアズハルの指導のもと、アズハルの世界的役割を支援する十分な能力を有している。それゆえ、会議はアズハル卒業生世界連盟を国際連合経済社会理事会（ECOSOC）に登録することを勧める。それによって、アズハルのメッセージを実現するため各民間団体との対話や、その成果の力によって、同連盟の力を強化することができるのである。

13－連盟が開催する会議の勧告をフォーローアップし、その勧告を実施するための手段・方法を見出し、成果や実現できなかった障害についての報告を提出するための常設委員会を設立する必要がある。

クルアーン：「人々よ、われは一人の男と一人の女からあなた方を創り、種族と部族に分けた。これはあなたがたを、互いに知り合うようにさせるためである。」
（49章13節）

中国山東省イスラーム協会主催WHC2009年次総会案内

イスラーム研究所客員教授　武 藤 英 臣

はじめに

去る8月15日から19日まで中国・山東省を訪ねた。世界ハラール評議会（World Halal Council：WHC）2009年度総会が、山東省イスラーム協会のホストで本年11月初旬に青島（Qingdao）において開催される予定なのでWHCとして受入側の準備状況視察とプログラム等事前協議のため訪ねた。WHC事務局長リンザーグ氏（フィリッピン）、WHC執行委員・事務局次長ファヒーム氏（マレーシア）、小生（WHC執行委員会副委員長）の三名で訪問した。

総会のホストとなる山東省イスラーム協会は3年前から中国開催を強く望んでいた。WHCとしては、中国側の開催提案を充分認識しながら、タイ（2008年）やマレーシア（2007年）での開催を優先し、中国で総会開催を引延ばしてきていたものである。

2007年総会において、WHC役員の総入替があり、山東省イスラーム協会がWHC執行委員に選出されたので執行委員会の強力な推薦のもと、2009年総会が中国で開催されることが決定されたのである。

中国のイスラーム事情

中国は“四市二十二省”から成り立っている。北京市、上海市、重慶市を“三市”と以前は言っていたが、最近は天津市を加えて“四市”という。これら特別市とは別に、22省と5自治区がある。5自治区は、1）新疆維吾爾（シンチアンウイグル）、2）西蔵（チベット）、3）寧夏回族（ニンシアホイツー）、4）内蒙古（ネイモンクー）、そしてベトナムとの国境にあり、オリジナルはベトナムの人々と同じであるともいわれている　5）広西壮族（コワンシーチョワンツー）自治区である。中国国内の大部分は漢族であるが、イスラームを信じる民族は10あるといわれ、それらは、1）回（フイ）、2）維吾爾（ウイグル）、3）ハザック、4）ウズベック、5）タジク、6）キルギス、7）タタール、8）サラー、9）トンシャン、10）フォーアンの順にあるとされている。国内の四市22省5自治区の中にムスリムのいない地区はないといわれている。それぞれの省にはイスラーム協会があり、それらを連合した形態で中国イスラーム協会があるという。従って、各省イスラーム協会会長は自動的に中国イスラーム協会副会長の肩書を持つとのことである。

済南・南大マスジド入口にて

中国山東省イスラーム協会

山東省の総人口96百万人の中、約55万人のムスリムが省都済南を中心に住み、省内には424のマスジドがあり、済南の清真南大寺は、600年ほど前に建立された由緒あるマスジドとして有名である。

山東省イスラーム協会は、1954年9月に設立され、省内各地区から選ばれた百六十名の代表者のなかの五十四名の管理委員で構成される人民委員会によって運営されている。常務運営委員会は三十二名で構成され、その中から一人の会長と七名の副会長、一人の事務局長と三名の事務局次長が選出され、次の四つの常設委員会から成立っている。

1．教育委員会:イマーム研修や訓練をおこなう。イスラーム行事関係に責任を持つ。
2．ハラール食品担当・協会運営事務局：イスラーム教徒の食品（すなわちハラール食品）生産企業やその製品査察、ハラール認証発給業務及び、協会事務を総括する。
3．ムスリム経済活動委員会：ムスリムの経済活動に関るあらゆる事案の相談とアドバイスに応じる。
4．文化交流促進委員会：ムスリムの文化交流、海外ムスリム要人の受入、イスラーム文化の一般国民への啓蒙活動に責任を負っている。

山東省イスラーム協会長の“イブラヒーム・丁　文方”師は、今年78歳で、水泳が趣味で、極寒の冬でも氷を割って毎日泳ぐのが日課とのこと。同師の名刺には「中国政協委員、中国伊斯蘭教協会副会長、山東省政協常委、民宗委副主任、山東省伊斯蘭教協会会長、済南大学原校長、伊ト拉欣・丁　文方　教授」とある。

一方、この協会の実質的リーダーは「中国・山東省伊斯蘭教協会副会長、事務局長　スレイマン・張　瑞正」である。彼は北京のイスラーム高等学院で教育を受け、その後、エジプトで研修を受けたといわれる。英語が解らないので、彼とのコミュニケーションはアラビア語に頼らざるを得ない。ハラール認証活動は古くから行っており、彼が認証する企業は山東省だけに限らず中国全土に広がっている。

山東省のハラール事情

2008年末時点で、200余のハラール食品生産企業が山東省イスラーム協会の指導のもと、ムスリム食品を生産し、それら製品は国内外に販売されている。イスラーム法に則った屠畜場は48あり、それらの企業には山東省イスラーム協会から203名のイマーム（イスラーム指導者）が派遣され、また屠畜場以外の加工食品企業に、200名以上のムスリムが山東省イスラーム協会の紹介で雇用され、中には企業トップに上り詰めたムスリムも居るとのことである。

2002年だけでも、5万トンのハラール鶏肉が中東・東南アジアのイスラーム諸国へ輸出された。また、2004年には1万トンの牛肉、羊肉が輸出されている。山東省イスラーム協会ハラール食品審査・認証業務は、山東省内だけに止まらず、中国国内10省に及んでいる。それらの産物は14ヶ国のイスラーム諸国に販売されている。

同協会は2001年から中国国内唯一のハラール認証団体として世界ハラール評議会に参加し、前述したように2007年から同評議会執行委員会委員として世界のハラール認証団体と提携し活動している。

世界ハラール評議会2009年中国総会スケジュール

ホスト：中国・山東省イスラーム協会（Shandong Islamic Association China : S.I.A.C.）
会　場：中国・山東省　青島香格里拉大飯店　大会議場
Name of Hotel : Shangri-La Hotel, Qingdao
Address : 9 Xiang Gang Zhong Lu, Qingdao 266071, China
日時＆プログラム
2009年11月10日（火）09:00－12:00
中国・山東省イスラーム協会2009世界ハラール大会
1）中国中央政府賓客、2）中国山東省政府賓客、3）その他来賓祝辞、4）ホスト側挨拶、5）WHC会長/執行委員長挨拶等
2009年11月10日（火）14:00 －18:00
2009年度 World Halal Council 年次総会開会式
WHC2009年度年次総会
2009年11月11日（水）～11月12日（木）
WHC総会　第二日目、第三日目　継続
2009年11月13日ハラール認証団体参加者帰国日

＊11月10日（火）昼食迄は、以下全員が参加出来る。
①各国政府諸機関、政府役人、
②ハラール認証団体、イスラーム団体、
③ハラール製品製造企業、ハラール認証取得希望企業、
④ハラールに関心ある企業・団体・個人・研究者

＊11月10日午後2時からの年次総会はハラール認証団体、政府関係者、イスラーム団体の参加に限定される。

総会参加費用：
ハラール認証団体／イスラーム団体であれば誰でも出席可能。但し、WHC事務局は、一団体につき資料費としてUS$200.-／団体、及び参加費として一人に付きUS$200.-／一人　を徴収する。
企業の参加希望者は11月10日中国ハラール世界大会それに続く昼食会に参加可能、但し一人につきUS$200.-/一人　山東イスラーム協会が徴収する。
宿泊は下記確保すること（宿泊費大会特別価格一泊US$115.個人負担）；
青島シャングリラホテル（Shangri-La Hotel, Qingdao）
Room Reservation for WHC 2009 AGM :
Mz. Isabel Feng, Convention Sales Manager : feng@shangri-la.com
尚、全ての参加希望者は下記山東省イスラーム協会へメール・電話等で事前確認連絡すること、その上で参加決定した場合は、世界ハラール評議会事務局へも同コピーを送付のこと。

中国・山東省イスラーム協会窓口：
Mr. Musa Chen （陳　廷信、　山東省伊斯蘭教協会）
Tel: 0086（China）-531-82563307、
Mobile: 0086（China）-13553177003
Fax: 0086（China）-531-82763336
Email: lexonchan@163.com
世界ハラール評議会窓口：
Mr. Atty.Hj.Abdul Rahman R.T. Linzag
Secretary-General, World Halal Council,
E-mail : artl1030@yahoo.com

平成21年度 第二回イスラーム講演会「イスラームの死生観」

イスラーム研究所主任研究員　柏 原 良 英

6月20日拓殖大学文京キャンパスC館で今年度の第2回イスラーム講演会が開催された。講師は当研究所の主任研究員である柏原良英で、テーマは「イスラームの死生観」について午後2時から4時まで質疑を含めて講演が行われた。50名近くの人が参加した。ここで講演の一部を報告する。

日本人の死生観

イスラームの死生観を考える場合、日本人の一般的な死生観について考えてその違いについてみてみる、日本人の多は死後のことについては漠然とした輪廻感か極楽浄土に行くであろうと考えるのが普通であろう。そこには死後のことは曖昧にしておく姿勢が見える。それより重要なのはどのような死にざまを迎えるかである。先ごろアカデミー賞を獲得した映画「おくりびと」は、遺体になった人をいかに丁寧に扱うかで話題になった事からも分かるように最後がよければ満足する傾向がみられる。逆にイスラームでは葬儀はごく簡単で質素に行われる。その違いはどこから来るのであろう。

イスラームの死生観

（1）タウヒード（神の唯一性）についての認識：存在の本源としてのアッラー

イスラームの一番重要な概念はアッラーの絶対的唯一性である。ラー・イラーハ・イッラッ・ラー（アッラー以外に神は無い）の言葉に象徴されるように、それはあらゆる神の存在を否定し、唯一の神アッラーだけを受け入れる。これは同時にアッラーがあらゆる存在の源であることを受け入れることにも通じる。「アッラーは、自存される」（クルアーン112章2節）アッラーは自らの存在を他の何にも頼ることなく存在する、言い換えるならアッラー以外の存在はアッラーの存在なしには存在できないことを意味する。それはアッラーが、人間も含めたこの世界に存在するあらゆるものの創造主であることであり、そのアッラーを受け入れることからしかイスラームの理解は始まらないということでもある。

（2）アッラーの創造：

創造主としての唯一の存在アッラーについてのクルアーンでの記述は数えきれないくらいである。

「幽玄界の鍵はかれの御許にあり、かれの外には誰もこれを知らない。かれは陸と海にある凡てのものを知っておられる。一枚の木の葉でも、かれがそれを知らずに落ちることはなく、また大地の暗闇の中の一粒の穀物でも、生気があるのか、または枯れているのか、明瞭な天の書の中にないものはないのである。」（6章59節）

人間の創造についても、それは現世での創造だけでなく来世における創造（復活）についてもアッラーがそれを行うと語られる。

「人びとよ、あなたがたは復活に就いて疑うのか。われがあなたがたを創るさいには先ず土から始め、次いで精液の一滴、次いで血の固まりとし、更に形をなした。また形をなさない肉塊から（あなたがたを創った）。あなたがたに（わが偉力を）明示するためである。われは欲する者を、定めた時期まで胎内に置き、それから赤ん坊としてあなたがたを出生させ、それから成年に到達させる。あなたがたの中或る者は（若くして）死なせる者もあり、また或る者は何がしかを知った後、凡て忘れ去る程に弱まる老齢に返される者もある。またあなたは大地が枯れて荒れ果てるのを見よう。だがわれが一度それに雨を降らせると、（生気が）躍動し膨らんで、凡ての植物が雌雄で美しく萌え出る。」（22章5節）

（3）アッラーの生と死の創造の意義：

この世に人間を生み出し、死なせ復活させるのは来世の存在にある。現世は限りあるもので来世こそ永遠の生が約束される。来世における生は二つに分かれる永遠の苦しみか、安楽。それを決めるのは現世での生き方による。

「（かれは）死と生を創られた方である。それは、あなたがたの中誰の行いが優れているのかを試みられるためで、かれは偉力ならびなく寛容であられる。」（67章2節）

現世での生き方の基本：

（1）信者への吉報：イスラームにおける信仰は心と行動が求められる。

「信仰して善行に勤しむ者には喜びの楽園があり」（31章8節）

（2）中庸の徳：アッラーからの恵みを楽しむことは禁じられないがそこには節度が求められる。

「アーダムの子孫よ、何処のマスジドでも清潔な衣服を体につけなさい。そして食べたり飲んだりしなさい。だが度を越してはならない。本当にかれは浪費する者を御好みにならない。」（7章31節）

（3）現世の生活への執着の否定：この世界に存在するものはいつかは消滅することの認識が求められる。

「現世の生活は、遊びか戯れに過ぎない。だが主を畏れる者には、来世の住まいこそ最も優れている。」（6章32節）

「現世の生活は、遊びや戯れに過ぎない。だが来世こそは、真実の生活である。」（29章64節）

（4）善を勧め悪を禁じる：イスラームの生き方の基本は善をおこない悪を禁じることにある。それは個人だけでなく共同体にも求められる。

「『息子よ、礼拝の務めを守り、善を（人に）勧め悪を禁じ、あなたに降りかかることを耐え忍べ。本当にそれはアッラーが人に定められたこと。』」（31章17節）

「あなたがたは、人類に遣された最良の共同体である。あなたがたは正しいことを命じ、邪悪なことを禁じ、アッラーを信奉する。」（3章110.節）

終末：現世から来世へ

（1）終末：アッラーはすべてのものを創造すると同時にすべてのものが破壊され、新たな世界を創造することを決めた。その最後の時の情景がクルアーンに多く描写される。それは恐ろしいあらゆる存在に及ぶ天変地異。

「太陽が包み隠される時、2．諸星が落ちる時、3．山々が散る時、4．孕んで10ケ月の雌駱駝が等閑にされる時、5．様々な野獣が（恐怖の余り）群をなし集まる時、6．大洋が沸きたち、溢れる時、7．それぞれの魂が（肉体と）組み合わされる時、8．生き埋められていた（女児が）9．どんな罪で殺されたかと問われる時、10．(天の)帳簿が、開かれる時、11．天が剥ぎ取られる時、12．獄火が炎を上げさせられる時、13．楽園が近付く時、」（81章1～13節）

「大地が激しく揺れ、2．大地がその重荷を投げ出し、3．「かれ（大地）に何事が起ったのか。」と人が言う時。4．その日（大地は）凡ての消息を語ろう、5．あなたの主が啓示されたことを。」（99章1～5節）

復活と審判（清算）：

新たな世界の入り口はアッラーによる厳正な審判である。人間は復活させられ、現世での行いを記した帳簿が渡されアッラーの審判を受ける。そこでその先に待つ天国と地獄へ振り分けられる。

「4．（それは）人間が飛散する蛾のようになる日。5．また山々が、梳かれた羊毛のようになる（日である）。6．それで、かれの秤が（善行で）重い者は、7．幸福で満ち足りて暮らすであろう。8．だが秤の軽い者は、9．奈落が、かれの里であろう。」（101章4～9節）

永遠の住処・来世：イスラームでの来世は明確である。そこにあるのは永遠の安楽の天国か永遠の苦しみの地獄のどちらかである。ゆえに今の生は来世での生活を得るための試練でしかない。クルアーンに描写される天国と地獄は当然ながら当時のアラブ人にとっての憧れであり嫌悪される場所として表現される。

（1）天国の描写：

「主を畏れる者に約束されている楽園を描いてみよう。そこには腐ることのない水を湛える川、味の変ることのない乳の川、飲む者に快い（美）酒の川、純良な蜜の川がある。またそこでは、凡ての種類の果実と、主からの御赦しを賜わる。」（47章15節）

「15．（かれらは錦の織物を）敷いた寝床の上に、16．向い合ってそれに寄り掛かる。17．永遠の（若さを保つ）少年たちがかれらの間を巡り、18．（手に手に）高坏や（輝く）水差し、汲立の飲物盃（を捧げる）。19．かれらは、それで後のさわりを残さず、泥酔することもない。20．また果実は、かれらの選ぶに任せ、21．種々の鳥の肉は、かれらの好みのまま。22．大きい輝くまなざしの、美しい乙女は、23．丁度秘蔵の真珠のよう。24．（これらは）かれらの行いに対する報奨である。」（56章15～24節）

（2）地獄の描写：

「41．左手の仲間、かれらは何であろう。42．（かれらは）焼け焦がすような風と、煮え立つ湯の中、43．黒煙の影に、44．涼しくもなく、爽やかでもない（中にいる）。52．必ずあなたがたはザックームの木（の実）を食べ、53．それで腹は一杯。54．その上煮え立つ湯を飲む、55．喉が乾いたラクダが飲むように。」（56章41～55節）

「64．それ（ザックーム）は地獄の底に生える木で，65．その実は，悪魔の頭のようである。」（37章64～65節）

正統四代カリフの時代（3）

イスラーム研究所所長　森　伸生

《前号からの続き》

アブーバクルの正式名

アブーバクルは通称であり、彼の正式名はアブドッラー・ブン・アブークファーハである。アブークファーハとは父親の通称であり、正式名はウスマーン・ブン・アーミルである。母親の敬称はウンム・アル・ハイルであり、正式名はサルマー・ビント・サフル・ブン・アーミルである。

伝えによると、アブーバクルはイスラーム以前はアブド・アルカアバと呼ばれていた。イスラームに入って、預言者ムハンマドが彼をアブドッラーと呼ぶようになった。また、彼はアティーク（解放された者）とも呼ばれていたことが伝えられている。その理由には諸説あり、その一つは、彼の母にはなかなか子供ができなかったので、もし彼女に子供ができたならば、その子の名前をアブド・アルカアバにすると、カアバの主に誓いを立てた。そして子供ができたので誓いを実行した。アブーバクルは成人し病死の恐れからも解放されたので、後にアティークと呼ばれるようになった。その渾名には病死もせずに成人したことへの感謝の意味が込められていた。

別の伝承では預言者がアブーバクルを「業火からのアティーク」と呼んでいたことが知られている。地獄とは無縁の人物ということである。

生涯の通称であるアブーバクルについては、その理由について何も伝承が残されていない。のちに、憶測として、イスラームになるのが早かった（バクル）のでそのように呼ばれたのではないかと言われている。

彼の名前を家系も一緒に述べると次のようになる。アブドッラー・ブン・ウスマーン・ブン・アーミル・ブン・アムルー・ブン・カアブ・ブン・サアド・ブン・タイム・ブン・ムッラ・ブン・カアブ・ブン・ルアイイ・ブン・ガーリブである。ムッラで預言者の家系と合わさる。

アブーバクルの結婚

アブーバクルの幼年期・少年期ともにあまり知られていないが、青年期になると反物商売の手伝いを始め、徐々に商才を発揮して、反物商人として成功していた。

商売も順調になった頃、サアドの娘のクタイラと結婚し、アブドッラーとアスマーの一男一女が生まれた。アブドッラーはイスラーム教徒になり預言者と共にターイフの戦いに参加する。彼は父親のカリフ時代に死ぬ。アスマーは後にヒジュラの時に預言者とアブーバクルに食料を運んで助ける。食料の革袋を彼女の腰紐で結んだことにより、「腰紐の君」の敬称で呼ばれるようになる。彼女はイスラーム教徒女性の中で最も勇敢な女性で知られている。

クタイラの次に、アーミルの娘のウンム・ローマンと結婚した。彼女との間にはアブドッラハマーンとアーイシャが生まれた。アーイシャは後に預言者の妻となる。アブドッラハマーンはバドルの戦いでクライシュ軍として戦い、父親アブーバクルに挑戦するが、後に彼はフダイビーヤの和約のとき、イスラームに入る。

アブーバクルはイスラーム教徒になってから、ウマイスの娘のアスマーと結婚し、ムハンマドが生まれた。次いで、ハーリジャの娘のハビーバと結婚し、ジャーリヤが生まれる。しかし、アブーバクルはジャーリヤの顔を見る前に他界する。

アブーバクルはこの大所帯を養うのに、ジャーヒリーヤ時代とイスラーム時代を通じて反物商売を手広く行なっていき、そして、莫大な財産を築いた。

アブーバクルの性格と風貌

彼の風貌は、色白で痩せ形で、頬は薄く、顔は痩せて、目は窪み、額は突き出ていた。赤い染料のヘンナで髪の毛とあごひげを染めていた。

彼が商売に成功を収めたのは、彼の生来の性格の良さにあるといえる。彼は人柄が良く、性格は繊細で、物事を行なうに沈着冷静であり、決して欲望に流されることない人物であった。アブーバクルはアラビアの伝統的性格を受け継いでいたが、イスラーム以前のジャーヒリーヤ時代の悪習慣とは程遠い存在であった。彼は青年時代から正直者で知られ、また親交を大切にして、人々に愛される人物であった。集会の場では礼節を守り乱れた行いは全く見られなかった。彼はジャーヒリーヤ時代でも自ずから酒類を禁じていた。イスラームになってから、「ジャーヒリヤ時代に酒を飲んでいましたか」と尋ねられた時、彼は「アウーズ、ビッラー（アッラーよ我を護り給え）」と答えた。彼は「なぜですか」と尋ねられ、「私は自分の名誉と男の尊厳を守りました。酒を飲む者は自分の名誉と男の尊厳を失ってしまうからです。」と答えた。

彼は優れた系図暗唱者でもあった。クライシュの中でその博識さにかなうものはいなかった。アブーバクルの知識は経験豊かな商売によって築かれたものであった。彼の部族の人達は彼を敬愛し、彼を信頼し、彼の地位・権威を認めていた。彼はジャーヒリーヤ時代においてもクライシュ族の長の一人であり、彼らの良き相談役の一人であった。ジャーヒリーヤ時代とイスラーム時代を通じて高貴さ・栄誉を受け継いだクライシュ族の実力者の一人であった。

ジャーヒリーヤ時代にアブーバクルが求めたもの

聖なる町マッカ・・・

遥か遠い昔に預言者イブラーヒーム（アブラハム）と彼の息子イスマーイール（イシュマイル）が一神教の基を築いた聖なる町マッカ、二人が唯一神の象徴として建立したカアバ聖殿を中央に配する聖なる町マッカ・・・

だが、月日の流れと共に聖なる町マッカにも偶像崇拝の熱風が吹き荒れ、砂地にしみ込む雨のようにマッカの人々の心にも多神教・偶像崇拝がしみついてしまった。

この地方では、特にアッラート、マナート、アルウッザーという三女神が崇められ、この三女神はアッラーの娘と考えられていた。アッラーはカアバ聖殿の主として特別な地位が与えられていた。後に、ムハンマドはこの多神教・偶像崇拝の最高神アッラーを万物の創造主・唯一なる神・アッラーへと純化させることになる。

カアバ聖殿の周りには沢山の偶像が安置され、人々はそれに祈りを捧げ、供え物をしていた。朝な夕なに偶像参拝者は途切れることなくカアバ聖殿の周りに詰め掛け、それぞれの部族の神と偶像を拝していた。これらの偶像崇拝の他にも、アラビア半島では様々な信仰の形が現れ、太陽崇拝などは良く知られていた。それ故、預言者が現われ、礼拝を信徒に課したとき、日没時と日の出時には礼拝を禁じていた。また他にも、天使を崇拝している者、ジン（幽鬼）を崇拝している者、星を崇拝している者様々であった。

その状況はあたかもイブラーヒームが伝えた唯一神の教えは遥かかなたに消えてしまったかのようであった。そんな偶像崇拝の渦巻く中にも、ひっそりとイブラーヒームの宗教の後継者達は人知れず息づいていた。数百年も前から、現われては消え、消えては現われしていた。しかし、彼らは人々に呼び掛ける確かな方法もなく、真理を求める叫び声は実を結ぶまでには至らなかった。

預言者ムハンマドが出現する直前にも、やはり真理を求める者達が現われていた。例えば、アブーカイス・ブン・アナスである。彼はクライシュ族の偶像を遠ざけ、家の中に祈りの場を設けて、イブラーヒームの主を崇拝していた。彼は預言者ムハンマドが現われるまで生き永らえ、イスラームに入った。そして、来るべき宗教を受け入れる素地を人々の心に築いた三人の人物がいた。コッス・ブン・サーイダ、ザイド・ブン・アムル、ワラカ・ブン・ナウファルである。彼らの心はイブラーヒームの宗教に結びつき、神の唯一性を求めていた。彼らは来るべき預言者について詩を詠み、輝ける夜明けが近いことを報せていた。ワラカは預言者ムハンマドの妻となるハディージャの従兄でもある。アブーバクルもこの人物達の斬新な言葉に耳を傾けていた。彼らの確信ある言葉の中に、アブーバクルの心は来るべき預言者の姿を見るようにもなり、クライシュ族の人々の生活に徐々に疑問を感じた。

何も応えることのない石で造られた偶像の周りを廻り願い事をしている姿を見るにつけ、「これが本当の導きなのだろうか」と自問するようになった。彼はザイド・ブン・アムルーの言葉を繰り返し呟いていた。

「唯一なる主か、千もの主か導きはいくつにも分かつものか」

自問自答は限りなく続き、抜け道のない迷路をさ迷うかのようにアブーバクルの心を悩ませた。

（以下次号へ続く）

クルアーン入門講座（5）

シャリーア（イスラーム法）とクルアーン

これまでにイスラーム文化の底に流れる三つの流れ、スンニー派に見られる法規範を中心に見たものと、シーア派に見られたイマーム中心的な見方と、スーフィズムに見られた個人的な内面を特に重視する見方の三つを検証した。

このことを頭に入れて再びイスラームを見てみると、現在、世界のイスラーム教徒の圧倒的多数がスンニー派に属していることが意味をもって来る。つまり普通、我々がイスラームを考える時に、思い描くイメージは実はスンニー派のシャリーア（イスラーム法）を中心に成り立っているイスラームであったということが理解されるのである。このことは逆にこのシャリーアを理解しなければ、大多数のイスラーム社会やイスラーム教徒達の考えるイスラームを理解したことにはならないことになる。そこでここではシャリーアについてクルアーンとの関係を含めて考えていきたい。

シャリーアとは何か

イスラーム教ではクルアーンが唯一絶対神アッラーから人類に与えられた最後のメッセージであると信じられている以上、イスラーム教徒が日常生活を含めたあらゆる問題に対して解答を求めようとする時、クルアーンにまずそれを求めようとすることは極く自然なごとであろう。クルアーンの啓示自体を見ても分かるように、預言者ムハンマドが何か事件に遭遇する度にその解答として啓示が下されるといった形態を基本的に取っており、神の意志を確認することが何事においても求められるのである。その意味でクルアーンには様々な規定が具体的に書かれている箇所が少なくない。しかしクルアーンがいくら具体的に書かれているからといっても、あらゆる問題に対して答えているわけではない。そこでそれを補うのがスンナと呼ばれる預言者ムハンマドのクルアーン以外の「言行」になってくるのである。例えばクルアーンには繰り返し「礼拝を行え」と書かれているが、具体的にどのようにして礼拝を行うかについては何も触れられていない。そこで礼拝のやり方を具体的に示してくれるのが、スンナである。現在イスラーム教徒が行っている礼拝のやり方は預言者ムハンマドが行った方法を踏襲しているのである。

こうしてスンナがクルアーンの次ぎに権威を持つことによりその不足を補うようになるが、それでも足りない場合には預言者ムハンマドと共に生きたサハーバと呼ばれる教友達の言行や判断が尊重される。彼らは預言者ムバンマドから直接イスラームを学んだ人々として尊敬されるがためで、同じ理由から彼らの次の世代の人々もタービウーン（第二世代）(注1)と呼ばれてサハーバほどではないが、尊敬される。

これは預言者ムハンマドがいる時代には何か問題が起これば啓示という形で神からの解決が得られたのが、彼の死後、神からの啓示も預言者からの指示も得ることが出来なくなった時点からいかにして問題を解決していくかを後の人々が考えていった結果生まれてきたもので、それがやがてシャリーア（イスラーム法）として体系付けられて行くのである。

シャリーアの意味

一般にシャリーアはイスラーム法と訳されるが、これは我々が普通考える法律という意味よりもっと意味が広い。その中には宗教儀礼に関する規範（イバーダート）から日常生活におけるもの（ムアーマラート）までを含んだあらゆる事柄に対して神から見たあるべき姿を提示するものである。もともとの言語上の意味は「人や家畜が水を求めてたどる道」「水場に至る道」という意味で、アッラーによって示された「正しい道」の意味である。それが後の学者によって一つの法規範の体系としてまとめられた時、シャリーアと呼ばれるようになったのである。

シャリーアの法源

これまでに見てきたようにシャリーアという法体系が形作られて行く原因は、日々展開される様々な問題に対してイスラームは、常にあるべき姿を信者に与え続けなければならない義務を負っているためである。

① 第一の法源「クルアーン」：

基準になるのは、言うまでもなくクルアーンであり、次に来るのがそれを補い明確にしているスンナである。

その意味で、クルアーンが一冊の書物として書き留められて、いち早く唯一の法源として明らかにされたことは当然の成行きであったし、イスラーム文化発展の基礎が固められたという意味で重要なことであった。

② 第二の法源「スンナ」：

第二の法源としてのスンナの編纂は預言者ムハンマドの死後、二世紀を経て各正伝ハディース(注2)としてなされた。これは当初、クルアーンとの混同が恐れられたために書き留められることはなかったが、サハーバ（預言者ムハンマドの教友達）から次の世代のタービウーン（サハーバと共に生きた人々）に語り継がれるというようにして口伝えによって伝えられ、最終的に編纂されることによって現在見られるような形になったのである。このハディースの編纂によってスンナが第二の法源として確定することになり、スンナに従う人々を意味するスンニー派の立場が明確になったばかりでなく、法学が大いに発展した。

③ 第三の法源「イジュマーウ」：

これはクルアーンとスンナに精通するイスラーム法学者（ウラマー）達の意見の一致を見た事柄のことである。クルアーンの第四章八三節に「だが彼らがもしそれを使徒、または彼らの中の権威を委ねられた者達にただせば、それを判断出来る」とあるように、イスラームにおいて変えることの出来ない法源であるクルアーンとスンナをいかに適用するかを任されているのが法学者達である。その法学者達による学問的努力の一致したものがイジュマーウで、クルアーン、スンナに次いで権威を持つものとされる。

④ 第四の法源「キャース（類推）」：

これはクルアーンやハディースに明確に記されていない問題について、それに類似した事項から三段論法によって演繹されるものをいう。この法源はイスラーム法学の基礎を完成させたとされる法学者シャーフィイー(注3)によって、当時法解釈の主流を占めていたラアィ（個人的考えによる解釈）を退け、クルアーン、ハディース、イジュマーウに次ぐ法源として確立された解釈である。

一般にこれらの四つがシャリーアの法源とされ、今日に至るまで様々な問題に対し、これらの法源をもとにクルアーンとスンナに則ったあるべき解答をだすべく努力が続けられて来ているのである。

（注1）タービウーン：アラビア語で「次に従う人々」の意味。

（注2）正伝ハディース：預言者ムハンマドの言行を正しく伝えたものだけを選んで編纂したのがサヒーフ（正伝）と呼ばれており、サヒーフ・ブハーリー、サヒーフ・ムスリムが有名で、その他アブー・ダーウードの「アッ・スナン」、テルミズィーの「アッ・スナン」、イブン・マージャの「アッ・スナン」、ナサーイーの「アッ・スナン」を合わせて六正伝書と呼ばれている。

（注3）シャーフィイー：イスラーム四大法学派の一つシャーフィイー派の開祖。

お問い合わせ先：拓殖大学イスラーム研究所
〒112-8585　東京都文京区小日向3-4-14
TEL：03-3947-2419　FAX：03-3947-9416
ホームページURL. http://www.cnc.takusyoku-u.ac.jp/

平成21年9月25日発行　第24号
発行人　拓殖大学イスラーム研究所
編集人　イスラーム研究所主任研究員
柏原　良英

拓殖大学　イスラーム研究所 ニューズレター

ムハンマドとイスラームの誕生（9）

ウフドの戦いで、戦死者が多数でたことで、寡婦や孤児が生じたことにより、一つの大きな社会問題となった。その解決方法として、一夫多妻制度がイスラーム社会の中に正式に導入された。

（19）ハンダク（塹壕）の戦い

ムハンマドは4倍の敵と互角に戦ったことで、ウフドの結果を敗北とは考えてはいなかった。むしろ、今後クライシュ勢と戦う為に、周囲の遊牧民を味方に引き入れるために積極的に動きだした。クライシュ族と通じてマディーナを脅かす恐れのある遊牧民は容赦なく攻撃し、壊滅させた。その一つとして、625年8月、ムハンマド暗殺計画発覚によりユダヤ人ナディール部族のマディーナからの追放がある。

クライシュ族も近隣の遊牧部族民に呼び掛け連合軍を結成し、マディーナ包囲作戦をすすめた。627年3月、クライシュ部族は約一万人の連合軍を率いて、マディーナに進撃した。連合軍はウフドの麓に陣を張った。これに対して、ムハンマドは3000人の軍勢を動員した。彼は今度はマディーナの町に立て篭もる作戦を取り、マディーナ周辺の敵に入られそうな場所には塹壕を掘らせた。これはムハンマドの弟子のペルシャ人サルマーンの提案であり、アラビアでは初めての戦法であった。そのため、この戦いはハンダク（塹壕）の戦いと呼ばれる。

マディーナ包囲は2週間続いたが、連合軍はその塹壕を破ることができなかった。彼らはユダヤ教徒のクライザ部族がイスラーム軍の背後から奇襲をかけることを望んでいたが、彼らの期待は裏切られた。全く攻める手段を失い、飼い葉も無くなり、指揮者たちは失望し、戦士たちは戦意を失い、4月中ごろに連合軍はそれぞれにマディーナを去っていった。

ムハンマドは連合軍が退去するのを見届けると、兵を集めクライザ部族を包囲した。彼らは決して中立な立場にいたのではなく、もし連合軍が塹壕を突破したならば背後からイスラーム軍を攻撃したのは明白であった。25日間にわたる包囲の後、クライザ部族は無条件降伏した。クライザ部族はアウス部族と同盟を結んでいたので、アウス族の一部の者がムハンマドに彼らの助命を嘆願した。そこで、ムハンマドはアウス部族の指導者であるサアド・ビン・ムアーズを裁判官に任命し、判決を任せた。アウス、クライザ両部族はこの提案に賛成した。サアドは、イスラーム以前の同盟関係よりもイスラームの信仰による結びつきが勝るという信念のもとに、判決を下した。彼の判決は極めて厳しく、「戦闘員は死刑、非戦闘員は奴隷として売る。」であった。

これにより、マディーナのユダヤ教徒の全部族は壊滅した。しかし、部族組織に属しない個人的なユダヤ教徒はその信仰を保持しマディーナに共存することが許された。

（20）マッカ征服：フダイビーヤの盟約

ハンダクの戦いからフダイビーヤの盟約の627年3月までの約10ヵ月の間に、ムハンマドは近隣部族に対してイスラーム軍の遠征を17回行なった。これは、ハンダクの戦いの時にマッカの連合軍に組した部族や、マッカ軍と内通していた部族に対する懲罰を意図していた。

ヒジュラ以後のムハンマドとムハージルーンの唯一の願望はマッカを奪還し、カアバ聖殿で礼拝を捧げることであったが、この頃になると、ムハンマドはマッカとマディーナを越えたアラブ全体の統合という問題を考えていたようである。そんな折、628年3月のある日、ムハンマドはカアバ聖殿で巡礼を行なった夢を見たと伝えられている。その夢の実現の為に、その年の3月15日およそ1500名を率いてマッカへ向かった。このことを察知したマッカ側は200名の騎馬隊を派遣して、これを阻止しようとした。ムハンマド勢はこれをかわし、険しい道を選び、マッカ郊外の聖域の外れにあるフダイビーヤに到着した。マッカ側はムハンマド勢が巡礼を強行すれば攻撃すると威嚇した。ムハンマドはマッカ側と数回にわたり交渉を行い、10年間の休戦や翌年の巡礼などを取り決めたフダイビーヤの盟約と呼ばれるものを結んだ。このフダイビーヤの盟約は一見、マッカに有利な取り決めのように受け取られ、イスラーム教徒の多くは不平不満をもらしていた。しかし、ムハンマドはこれを外交上の勝利と受け止めた。事実、この盟約により、クライシュ族との同盟を破棄することができ、ムハンマドと同盟を結ぶ部族が現われてきた。また、ムハンマドはこの盟約で平和的意図を示し、マッカの無血征服を考えだしていた。

研究会報告

【平成21年度第1回イスラーム講演会開催】

今年度第1回目のイスラーム講演会を6月6日六本木にあるイランレストラン「アラジン」で「イスラームと食文化」と題して、当研究所客員教授の有見次郎氏を講師に開催した。この「イスラームと食文化」の講演会は昨年トルコレストランで行って好評だったので今回はイラン料理を味わうということで昨年に続き行われたものである。60人ほどの参加があり、食に関するイスラームのマナーやハラールやハラームの規則などの説明がされた後、実際に食べてみることでイスラームを身近に感じる良い機会として好評だった。

【平成21年度第2回タフスィール研究会開催】

今年度第2回目のタフスィール（クルアーン解釈）研究会が、7月25日午後2時より文京キャンパスC館で開かれた。今回は遠藤利夫講師がクルアーン第5章の8～34節を読んだ。ここのテーマは大きく2つに分かれ、一つはイスラームにおける公正さであり、もう一つは人命の尊さについてであった。それは一人の人の生命を救うことは全人類の生命を救ったことと同じだとクルアーンに書かれている。

محتويات العدد

1.تدريب لمدققي الهيئات العالمية للتصديق على المواد الحلال
أستاذ زائر بمعهد دراسات الشريعة: توشيئو إندو
2.مؤتمر الرابطة العالمية الرابعة لخريجي الأزهر
أستاذ زائر بمعهد دراسات الشريعة: كيميأكي توكوماسو
3 إعلان اجتماع العام لمجلس الحلال العالمي في الصين
رئيس لجنة الشريعة بمعهد دراسات الشريعة: هيديئومي موتو
4.المحاضرة الإسلامية الثانية (الحياة والموت في الإسلام)
باحث بمعهد دراسات الشريعة: يوشيهيدي كاشيهارا
5. مقال: الخلفاء الراشدين (3)
مدير معهد دراسات الشريعة: نوبوأو موري
6. مدخل علوم القرآن (5)
باحث بمعهد دراسات الشريعة: يوشيهيدي كاشيهارا
7. السيرة النبوية (9)
أخبار المعهد: الدورة الثانية لدراسات التفسير سورة المائدة
المحاضرة الإسلامية الأولى(أطعمة في الإسلام)